

平成 30 年 3 学期始業式 式辞

明けましておめでとうございます。

と新年のご挨拶はいたしました。5 日が 24 節気の「小寒(しょうかん)」で寒になりましたから、「寒中お見舞いを申しあげます」の方がこの季節にふさわしい表現になるでしょう。

さて、今学期の始業式にあたり、このお正月に津村別院にて勤まりました相愛元旦礼拝でお話しした年頭の言葉を先にくり返しておきます。

新しい年を迎え、今年こそは…と新年の計を元旦に立てるのが習わしだと思いますが、私にとって、昨年 12 月 10 日ノルウェーのオスロで催されたノーベル平和賞授賞式に述べられた言葉が、新しい年の、そして将来にわたる固い決意になりました。印象的な言葉です。その言葉は『あきらめるな』です。

この『あきらめるな』は、広島に原爆が投下された 1945 年 8 月 6 日、13 歳の少女が崩壊した建物の下で聞いた外からの声でした。

『あきらめるな!(ガレキを)押し続けろ!蹴り続けろ!あなたを助けてあげるから。あの隙間から光が入ってくるのが見えるだろう。そこに向かって、なるべく早くはって行きなさい』

その声に励まされ導かれ、そして救出されました。昨年のノーベル平和賞の授賞式に、国際 NGO 核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)の事務局長と並んで、被爆者代表として受賞記念講演の舞台に立ち、述べられた言葉でした。今回は外から聞こえた言葉ではありません。全世界に向け、核廃絶の実現を『あきらめるな』と繰り返されたのです。被爆当時 13 歳の少女だった方、サーロー節子さん、85 歳の声でありました。

世界情勢は緊迫の度を増しております。核保有国は 9 ヶ国、計 15,000 発の核爆弾が存在します。地球を何十回破壊できる量です。核なき世界へ向かう歩みを『あきらめない』元年にしなければなりません。

宗門の立場、相愛の建学の精神は、「仏説無量寿経」に著された「兵戈無用(ひょうがむよう)、兵戈とは“ほこ”つまり長柄の武器のこと、転じて戦争も否定する世界のこと」の実現を目指しているのです。決して『あきらめない』運動を粘り強く進める立場にいるのです。

世界の核をめぐる構図を簡単に整理しておきます。核保有国は核抑止力を信じています。核兵器で武装することが、力の均衡を保ち唯一戦争を抑止できる道であるとの考えからです。つまり、人類最強の武器を手にした国に戦争を仕

掛けることはないだろうから平和が保たれるというものです。

一方、核廃絶は核兵器の非人道性のみならず、地球絶滅の脅威を永遠にとり除こうと願う運動です。唯一の被爆国である日本は、その被爆体験から、核廃絶の運動に加わるはずが、昨年7月国連で122ヶ国の賛成を得て採択された「核兵器禁止条約」には反対しました。なぜだと思いますか?それはアメリカの「核の傘の下」にあるからです。アメリカは核保有国で、日本はその核兵器の威力に守られている状態にあるから核抑止力のほうを支持したのです。

こういう複雑な世界情勢の中で、昨年ノーベル平和賞が核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)に贈られた意義をしっかりと学習して欲しいと思います。みなさんはこれからの日本を、世界をつくっていく人ですからね。平和とは何か、みなさん一人ひとりがどう考えどう行動するのか、お願いしますよ。

以上をもって式辞といたします。

2018(平成30)年 1月9日 相愛中学校・高等学校
学校長 安井大悟